

# 群馬県長野原町石川原遺跡の埋没建物から出土した陶磁器

## — 喫茶碗と会食の器について —

矢 口 裕 之

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 浅間天明噴火の推移と石川原遺跡の埋没建物
2. 建物から出土した食器

3. 考察

おわりに

## — 要 旨 —

江戸時代の1783（天明3）年に浅間山が噴火し、新暦の8月5日午前の爆発によって発生した天明泥流堆積物は、半刻の間に川原湯村に達して集落の一部を埋没させた。

埋没した建物に残された陶磁器の出土位置や食器構成は、居住者の食や喫茶に関する生活の断片である。その日の朝に人々は囲炉裏端で茶を喫し、それは茶葉を茶釜や薬缶で煮出した享茶であった。

27号建物では茶を茶筅で点じる振り茶の道具が認められた。周辺の遺跡からも茶筅や大碗が出土し、振り茶の喫茶習慣の広がりを認める。遺跡から出土した喫茶碗は振り茶と茶筅を使用しない享茶が共存している様相を示す。喫茶碗と共に伴する食器は石川原遺跡とその周辺で喫茶に伴う会食が行われていたことを示唆する。

### キーワード

対象時代 江戸時代

対象地域 群馬県北西部 吾妻地域

研究対象 近世陶磁器 喫茶碗 火山灰考古学

## はじめに

群馬県と長野県境に位置する浅間火山は、江戸時代の1783(天明3)年に噴火し、吾妻川流域に土砂災害を及ぼした。この一連の噴火は浅間天明三年(1783年)噴火と呼ばれる。噴火の末期、新暦の8月5日に発生した鎌原岩などれ堆積物は、吾妻川に流入して天明泥流堆積物と呼ばれ利根川に達した。

群馬県長野原町の石川原遺跡は八ッ場ダム建設事業に伴い、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成20年度と平成26～令和元年度に発掘調査を行い、令和3年7月に発掘調査報告書を刊行した。筆者は発掘調査報告書の整理作業で陶磁器を分担し、報告書に遺物の実測図や観察表、写真を掲載した。本文は報告書の作成過程で得られた陶磁器観察の一部について考察を加えたものである。それは「石川原遺跡の埋没建物に残された食器の出土状態は埋没前の何を語るのか」、「出土した食器からどのような居住者を想定できるか」の2点である。

一般的に発掘調査では多くの竪穴建物から遺物が出土する。しかしそれらの遺物は例外を除いて竪穴建物での生活が居住者の移動により中断し、住居が廃絶された瞬間に残されたものである。また、多くの遺物は居住者が移動した瞬間から風雨や流水、上屋の崩落等により位置を移動し、遺物が地層に覆われた瞬間に一部が固定されるものの、その後の霜柱や動植物による土壤攪乱によって微妙に移動すると考えられる。

これらの条件を満たさない事例として瞬時に土砂で埋没した竪穴建物や火災に伴い焼失した竪穴建物の遺物があげられる。しかし、これらの事例も廃絶した建物を土砂が埋めた場合や建物焼失の原因が生活中の不慮の火災であるか、生活の中斷に伴う移動前の放火であるか、同様に例えれば疫病等による移動前の人為的な放火であるかなどの事例ごとに出土した遺物の構成は異なるであろう。

発掘調査で出土した遺物は、このような条件下で居住者の生活と出土遺物の構成に大きな断絶と解離が存在している。これは考古遺物における Missing-link (失われた環) に例えられる。

石川原遺跡は浅間山の噴火に伴う天明泥流堆積物により埋没した集落遺跡(図1)であり、遺構には泥流堆積物で瞬時に埋没した建物(家屋)が含まれる。石川原遺跡で埋没した集落に存在した不動院(図1の5)は地域の中心的な存在であり、住職が天明泥流堆積物から避難する様の証言が史料の「天明三年七月砂降候以後之記録」に残されている(萩原1985)。それにより石川原遺跡は天明泥流堆積物に埋没した時刻とその過程を知ることができる。

このように石川原遺跡の埋没建物に残された遺物は、その位置と構成により生活具の使用や収納、埋没時の居住者の痕跡を記録している。このような遺物群と遺構を

総合的に理解することは、失われた近世集落の生活の断片を垣間見ることを可能とし、文字史料に残らず従来の発掘からも得られなかった資料の隙間を埋めるものである。これらは重要な近世の歴史遺産と考えられる。

## 1. 浅間天明噴火の推移と石川原遺跡の埋没建物

浅間天明噴火は多くの史料が残されており、火山学的な視点による史料の解釈から噴火の推移が明らかにされている。以下は荒牧(1968・1993)、今井・三ヶ田(1984)、早田(1995・2007)、田村・早川(1995)、安井・小屋口・荒牧(1997)、安井(2007)、いさぼうネット(2021)などにより示された噴火推移の概要である。なお記述した月日は新暦に、時刻は江戸時代の不定時法の時刻をこの季節の関東地方の時刻に換算した。

5月8～10日に噴火がはじまった。5月上旬の噴火のあと噴煙が絶えることなく45日間は静穏だった。6月25日に爆発的な噴火があり、その後19日間は静穏だったが7月17日に噴火し、北麓の集落に軽石が降下した。7月26日から本格的な噴火が開始され、27～30日には北西方に向に降灰した。おそらく石川原遺跡の集落にも軽石は降下した。

8月2～3日からは連続的な噴火がはじまり、追分や沓掛宿では老人や子供の避難がはじまる。軽井沢宿では火山弾によって45軒が焼失した。

8月4日の午前に噴火は激しさを増し、追分や沓掛宿の住民が逃げ出す。午後は群馬南部の一帯が降灰によって暗闇となり、軽井沢宿で若い男が軽石の落下で即死した。これによって軽井沢は突発的な混乱状態に陥り、住民が四方に逃げ出した。午後と夕方から夜にかけて吾妻火砕流が発生し、北麓の山林を襲った。夜には200km離れた場所で空が赤く見え、関西でも鳴動が記録された。

石川原遺跡が所在する吾妻郡川原湯村は軽石降灰軸の北方、降灰域の外側にあり、南の空は噴煙で埋まるがその主体は上空に達していない。夜になれば浅間山がある南西方向の空は暗闇を照らして赤く焼け、夜半には村人の不安も頂点に達したであろう。噴火に伴う火山雷や鳴動は昼から夜にかけて終夜激しいものが続き、不動院住職は気分が悪くなり臥せっていた。かなりの村人が眠れぬ一夜を過ごし、まんじりとした心持ちで8月5日の夜明けを迎えたのに違いない。

この夜、浅間山の山頂火口は噴き上げた溶岩の破片が噴泉となって北側の山体斜面に落下し、鬼押し出し溶岩はそれ以前に火口から流下を開始したようだ。

8月5日は朝まで激しい噴火が続き、朝方は断続的に継続したが噴火は終息に向かって静穏になった。この頃、足利では朝五ツ(6時47分)に降灰のため暗く、行灯をつけて朝食をとった(萩原1989)。石川原遺跡の集落でも鳴動が落ち着いたこの頃に各家が「おちゃのこ」と呼ばれる

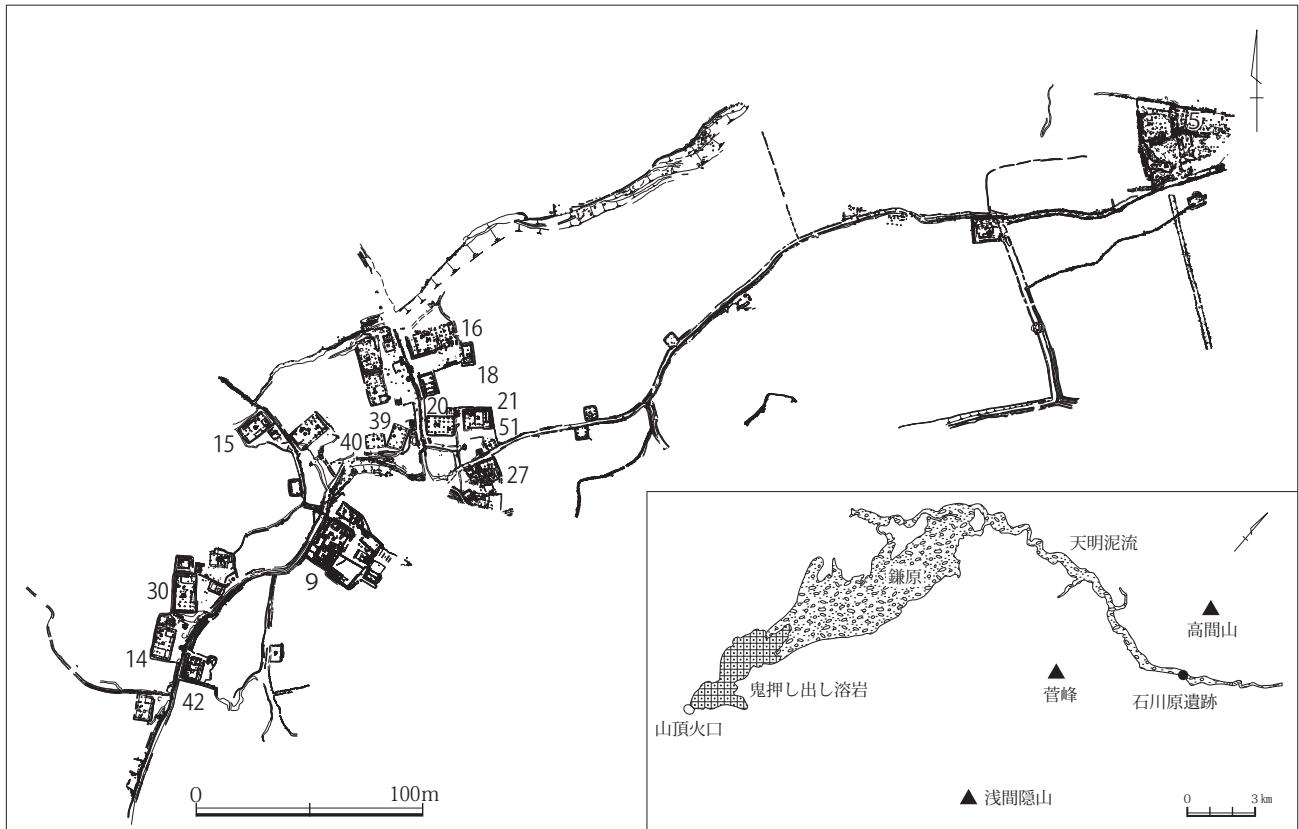


図1 石川原遺跡の位置と建物の配置

朝飯前の軽食を摂ったであろう。未明に柳井沼を水源とする鎌原用水源泉で泥の湧き出しが目撃され、鎌原集落の一部では避難行動が開始された。

朝四ツ(9時16分)に北麓の柳井沼付近で突然に爆発が起り、鎌原岩なだれ“debris avalanche”が発生した。岩なだれは瞬時に山麓の鎌原集落に迫り、朝食後に避難を開始する予定の村人を襲って吾妻川に流入した。四ツ半(10時31分)には石川原遺跡がある川原湯村の吾妻川河床に達している。

天明泥流堆積物“hot lahar”的本体は吾妻川の谷を下流に向かって猛スピードで流下した。石川原遺跡の集落では徐々に泥流が河川から溢れて上昇し、不動院を1.2m埋没させた。この時の埋没速度は緩やかで不動院住職が斜面を逃げる約20分程度の時間であったと想定される。この間に石川原遺跡の埋没建物群が形成され、屋敷16軒(建物37棟)、屋敷以外の建物9棟、寺院を構成する3棟の建物を含む集落は泥流堆積物によって埋没した。

## 2. 建物から出土した食器

### (1)分析の方法

建物から出土した陶磁器は器種や残存状況から報告書掲載遺物と非掲載遺物に分類した。掲載遺物は遺物写真、実測図や拓本及び遺物観察表を作成し、遺構平面図や測

量図面から遺物の出土位置を読み取った。非掲載遺物は遺構毎に陶磁器の種類を大別し、破片数と重量を測定した。建物の非掲載遺物は産地毎に器種分類し、部位と破片数を計測し最小個体数を推定した。

なお、碗は長佐古(2002)を参考にして碗(大碗や中碗)と小碗は口径8.0cm前後を境に区分した。碗類や一部の器種については掲載遺物と非掲載遺物の数量から出土した個体数を把握した(表1)。木製品や漆碗の個体数は掲載した遺物量がおおむねの個体数と想定される(表2)。

出土した食器を中心とした陶磁器の用途は器種分類から推定された考古学的な見解と文献史料などの知見を基本としたが遺物の数量や位置情報と建物の間取りとの関係を民俗例や古建築の事例から解釈し、埋没時の使用状況を検討した。また、陶磁器と金属製品や木製品、石製品などの共伴遺物から食器の収納に関する状況を推定した。石川原遺跡の屋敷の区分や建物名については発掘調査報告書に準じた。

### (2)天明泥流堆積物における「遺物化」

化石を扱う古生物学には、生物の遺骸が岩石に移り変わっていく過程や成因を研究するタフォノミー(taphonomy)と呼ばれる学術が存在する。

流体としての天明泥流堆積物により埋没建物が形成され、堆積物に遺物が埋まる過程はこれを理解しないと

表1 建物から出土した陶磁器製の食器

屋敷番号	建物番号	国産磁器						国産施釉陶器												碗小計	小計			
		肥前磁器						肥前陶器		瀬戸・美濃陶器								京信楽系陶器		産地未詳				
		碗		皿		猪口	瓶	碗		皿		蓋	水注	瓶	碗		碗	せんじ碗	皿					
		碗	小碗	筒碗	大皿			碗	小碗	筒碗	せんじ碗				大皿	皿								
不動院	5	3	1	2		4	1		1										1		9	14		
	2	9	4	2	1			1		9		3	1						1		21	22		
	9	14	4	1					1	1	4	3			1	1					13	16		
	6	15	7	1				1		3		4	2		1						18	19		
	3	16	5	1	2			2	1		9		2	1	1						21	24		
	5	21	8	1	1				2		6						9	3	1		19	31		
	5	51	6	4				2	3	3		3	1				4	10	1	3		17	40	
	4	20																			0	0		
	15	27	6	1	1				2		6	1				8	1	2			16	28		
	13	39	3	2	2			1	1	1	2	8	4	5			3		1			18	33	
	16	40									1										1	1		
	12	42	4	1					1		3	1	1				1		1		1	12	15	
	小計		50	15	8	1	9	5	4	33	9	37	15	2	1	1	35	5	7	2	1	1	164	241
	合計		92						149															

表2 建物から出土した木製の食器

屋敷番号	建物番号	木製品 梗類																	小計		
		椀			浅椀			深椀			平椀			壺椀			漆椀				
		椀	小椀	破片	椀	小椀	破片	椀	小椀	破片	椀	小椀	破片	椀	小椀	破片	椀	小椀	破片		
3	16																	1	1	2	
3	18																	1	1	1	
4	20			1			1													2	
5	21																	1	2	4	7
5	51	6	4	3	1	1	1	1	1	1								1		19	
		13			3			2			0			0			1				
15	27	2			4			3		1	8		2	10		1	1	1		33	
		2			4			4			10			11			2				
12	42			1																1	
小計		8	4	5	5	1	2	4	0	2	8	0	2	10	0	1	3	4	6	65	
合計		17			8			6			10			11			13				

出土した遺物と出土しなかった遺物の正しい理解ができない。出土した遺物の数量を議論するために、こうした認識の構築は不可欠である。

噴火後に鎌原岩なだれ堆積物を起源として吾妻川で発生した天明泥流堆積物は堆積物重力流と総称される密度流であり、河川で運搬・堆積した粉体や流体の混合物からなる碎屑物と水からなる固液混合流である。特に泥流堆積物は粘着性重力流に細分され、細粒成分を多く含む流れの堆積物からなる。

岩なだれや泥流堆積物にはリジット・プラグ(rigid plug)と呼ばれる特徴があり、泥流内では攪拌が起こらず碎屑物は固定された状態で運搬される。しかし流下する勾配が小さくなるとそれは厚みを増して、せん断応力が減少すると泥流の流れは停止して堆積をはじめる(徐・平1989)。この時に泥流の表面から排水される二次的な流れが生じなければ、泥流堆積物は流れていた状態を残して堆積を終了する。

しかし天明泥流堆積物のように砂や礫を多く含む場合は、流れの厚さや勾配によって流れが速度の変化によって層流から乱流に変化する場合がある。その場合には埋没建物の内部で流れは乱流として挙動し、泥流内で密度や粘性の変化をもたらす。このような場合、急速に押し寄せた泥流堆積物が速やかに床面の遺物をその場に包み込む場合と一定方向に吹き寄せる場合、乱流によって床面から遺物が泥流堆積物中に取り込まれる可能性など複数の堆積の様相があることを示唆する。

石川原遺跡等の天明泥流の発掘調査では、通常床面から+20cm程度まで重機掘削し、泥流堆積物を除去している。床面で多くの遺物が検出されている一方で、比較的規模の大きな建物でも陶磁器の出土が少ない8号屋敷30号建物などが上げられる。これは泥流堆積物に取り込まれた遺物が掘削中に除去された結果と考えられる。また泥流が建物を埋める過程で棚などから落下した遺物も多くは泥流堆積物に取り込まれて出土していないものと考

えられる(図2)。

### (3)建物から出土した陶磁器

碗は陶器や磁器の碗、小碗(紅猪口を含む)、筒碗、その他の碗からなり猪口は磁器のみである。陶器と磁器の瓶は、徳利や御神酒徳利などである。水注(汁次)は陶器から構成される。

皿は陶器と磁器からなり、磁器の染付皿は多くない。それ以外の器種に片口、すり鉢、鉢、壺、甕、鍋、香炉、灯明皿、灯明受皿、平仄などの灯火具、仏花瓶、仏飯具などの仏具や蓋、蓋物、鬚水入れ、土人形、碗等の二次加工品が上げられる。

陶磁器の種類は、瀬戸・美濃陶器や肥前磁器と陶器、京・信楽系陶器、丹波・明石系陶器、志戸呂陶器、在地系土器などである。これらの陶磁器の種類と器種構成は群馬県内の江戸後期の遺跡の出土例(黒澤・大西2009)と一致し、天明泥流に襲われた福島中町遺跡の建物群出土の陶磁器構成に近似する。

なお天明以降、19世紀第2四半期の陶磁器の碗類に関して、江戸時代天保年間の風俗を記した類書である『守貞謹稿』は、磁器の飯碗を茶碗と言い、茶用には「茶のみ茶碗」、飯用には「茶漬茶碗」といって蓋の有無で区別している。また筒茶碗は下品用であるとした。碗の用途は神崎(1996)や長佐古(2001,2002)を参考にして肥前磁器の染付中碗を飯茶共用の飯茶碗に、『尾張名所図会』編さんの史料「春日井」に示されたせんじ碗及び陶胎染付碗、筒碗、小碗、陶器大碗等を喫茶碗に比定した。

### (4)出土した碗とその他の遺物

#### 不動院5号建物(庫裏)

碗は9点出土した。内訳は染付中碗3点、小碗、蓋付筒碗(灰吹)と筒碗2点と陶胎染付碗や灰釉大碗、天目碗片の構成である。遺物は建物南西角や6号建物との境にある溝から出土した(図3)。

筒碗と灰吹、小碗(以下5号建物1, 7, 9, 15)は染付の窓絵の隙間を斜線交叉文で埋める意匠が共通し、これらは組合わせて入手した可能性がある。その他に猪口(32)、揃いの4.5寸染付中皿3点(11~13)は板間の1号廻炉裏付近から、薬缶の蓋やすり鉢や鉄釜が出土した。

灯火具は10点出土し、大と小で最小6組が想定される。建物内に多くの灯りを必要とすることは、この場所が寺院の一部であることと矛盾せず、灯火具の多さは一般家屋との違いを示す。

#### 2号屋敷9号建物(蔵持主屋)

碗は21点出土した。内訳は染付中碗4点、小碗2点、筒碗と陶胎染付碗9点や陶器の碗3点、小碗、せんじ碗の構成である。板間北側の部屋から陶胎染付碗(以下9号建物6, 7)、筒碗(18)、陶器水盤2点が出土しており倉庫の様な機能が想定された。室や馬屋から陶器碗(3)と陶胎染付碗2点(5, 10)が、風呂からも陶胎染付碗(9)

### 建物で使用された製品(遺物)

泥流堆積物や発掘調査で失われた遺物・風化等で消失した遺物

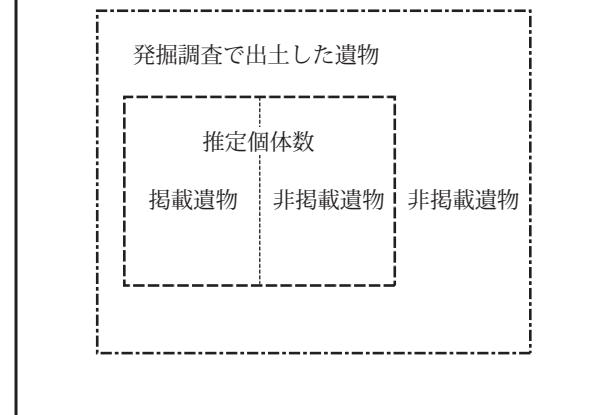


図2 出土遺物の概念

が出土した。多く出土した陶胎染付碗には茶渋の付着がなく、底面に擦痕は認められない。その他に猪口(19)が出土した。

2号廻炉裏からは染付小碗(1)、色絵小碗(2)、染付碗2点(12, 13)、陶胎染付碗3点(4, 8, 11)、陶器碗(17)、京・信楽系陶器のせんじ碗(16)が出土した。

碗は多数出土するが、皿の出土はない。調理具ではすり鉢3点や竈から鉄鍋が出土した。また灯火具2組が出土した。

#### 2号屋敷10号建物(付属板敷建物)

国産の施釉陶器の破片、鉄製品や銅製品の煙管吸口が出土したが、木製品は出土しない。埋没時に廻炉裏は使用されていない。

#### 9号屋敷14号建物(主屋)

碗は13点出土した。内訳は染付中碗4点、小碗(紅猪口)と陶胎染付碗や陶器碗4点、小碗3点の構成である。陶器碗には腰錆碗や鉄絵碗が含まれる。陶器皿3点が出土したが、陶磁器の構成要素は少ない。

土座2の南西隅から紅猪口(以下14号建物1)が出土した。廻炉裏の北西部分から腰錆碗(9)が出土し、喫茶の状況を示す。建物土間と馬屋との境付近から集中して遺物が出土し、陶胎染付碗(5)、陶器碗(10)、小碗3点(2~4)が出土した。これらの遺物は泥流堆積物で土間に吹き寄せられた可能性がある。洗い場からは加工したすり鉢が出土した。集石から破片になった織部意匠の8寸大皿(12)の出土が特筆される。

#### 6号屋敷15号建物(主屋)

碗は18点出土した。内訳は染付中碗7点、小碗(紅猪口)と陶胎染付碗3点や陶器碗4点、小碗2点、せんじ碗の構成である。陶器の飴釉碗(以下15号建物12)には漆の補修痕が認められ、大切に使用された。調理具ではすり鉢

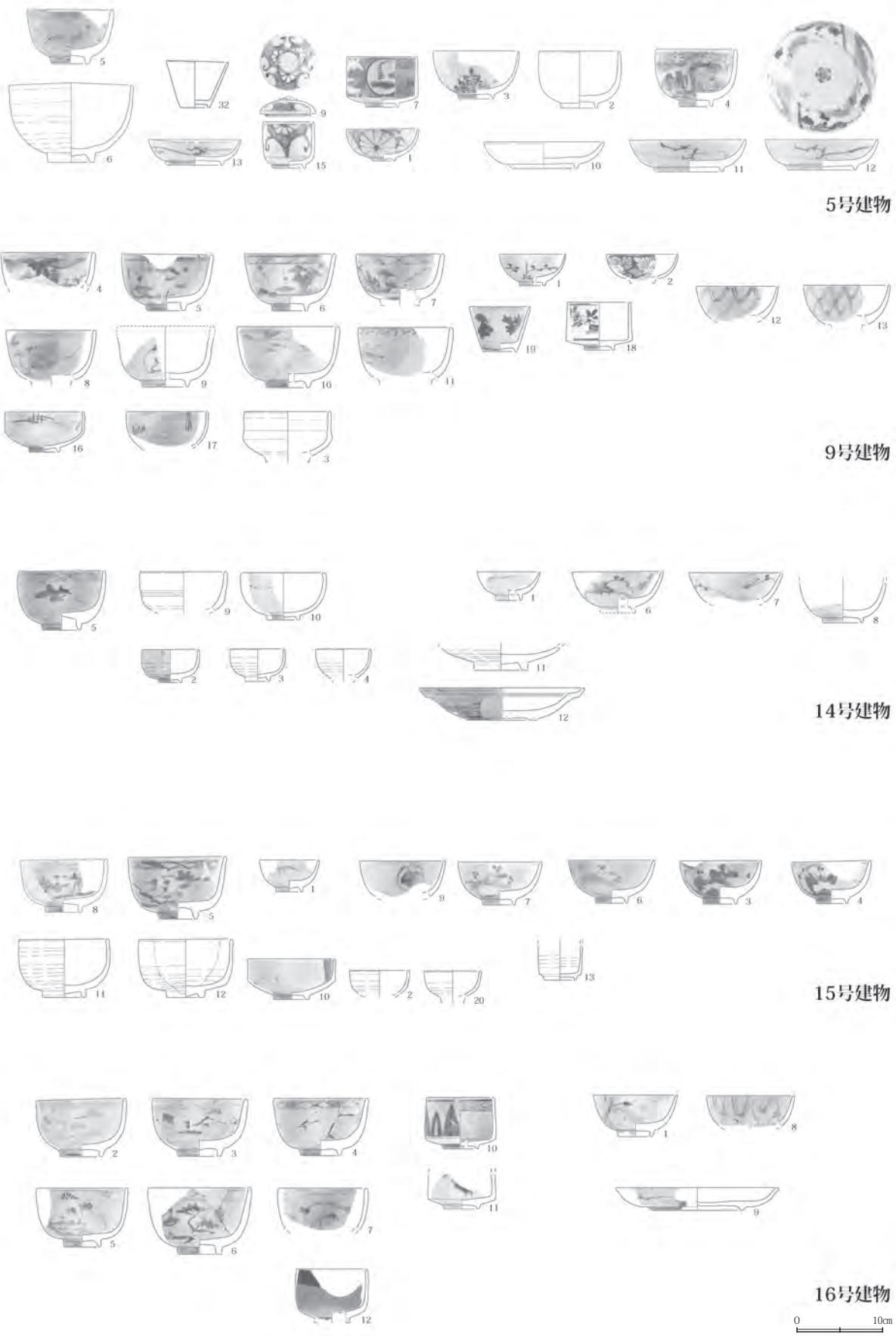


図3 5・9・14~16号建物の食器

が出土したが、陶磁器の構成要素は極めて少ない。

遺物は囲炉裏周辺からまとまって出土した。破片を含め染付碗7点に陶胎染付碗と陶器碗類7点が出土したが、完形品では染付碗4点、陶胎染付碗2点、飴釉碗2点である。碗は多数出土したが皿は出土せず、猪口が出土した。

竈から陶器小碗(2)が、囲炉裏周辺から染付碗2点(3,6)、陶胎染付碗(8)、陶器碗2点(11,12)、鉄鍋2点、茶釜の蓋と内部に布痕が残る茶釜が出土し、建物内の馬屋から色絵不明製品が出土。染付碗2点(4,9)とせんじ碗(10)、白磁猪口(13)は建物外の北東側に散乱した。  
3号屋敷16号建物(蔵持主屋)

碗は21点出土した。内訳は染付中碗5点、筒碗2点、小碗と陶胎染付碗9点や陶器碗2点、筒碗や小碗の構成である。猪口、6寸染付中皿が出土した。板間(下座敷)北側から多くの遺物が出土した。陶胎染付碗は茶渋の付着はなく、底面に擦痕が少し認められる。木製品の漆碗2点が出土した。調理具はすり鉢2点、鉄鍋、竈から鉄釜が出土した。

板間1(下座敷)の1号囲炉裏周辺から染付碗(以下16号建物8)、陶胎染付碗(5)、染付筒碗(11)が出土、竈に近い室から陶器碗(12)、すり鉢が、板間2(座敷)の2号囲炉裏付近では離れた場所から陶胎染付碗2点(4,6)、染付筒碗(10)が出土したが食器の出土は少ない。3号囲炉裏付近では出土しない。

#### 3号屋敷18号建物(付属板敷建物)

陶胎染付碗、漆椀の破片が出土し、その他は陶器瓶片と灯火具が出土した。

#### 5号屋敷21号建物(主屋)

碗は19点出土した。内訳は染付中碗8点、小碗(紅猪口)、筒碗と陶胎染付碗2点や陶器碗6点、せんじ碗の構成である(図4)。その他に皿は陶器4寸小皿8点、水注3点が出土した。木製品は漆碗7点が出土し、内訳は椀、小椀2点、破片4点である。

土間にある竈には口径60cmの大型の鉄釜が据えられた状態で出土した。土座の1号囲炉裏から染付碗(以下21号建物2)と紅猪口(1)、囲炉裏の中からすり鉢が、北西隅からヘラと櫛が出土した。土座と土間の境界からは染付碗(4)が、建物の土間と土座の南には下駄が散乱し、膳に入った漆椀3点と杓子やヘラが出土した。

板間の北東の桶から鉄鍋2点と薬缶の蓋が出土し、鉄鍋の個体数は3である。水注(19,20)、陶器皿8客揃い(10-1~8)、陶器碗(11)、仏具や灯火具が1・2号収納箱から出土し、中央の仏壇から水注(21)、10客の膳、匙かヘラ、曲物、重箱が戸棚から出土した。

#### 5号屋敷51号建物(小屋)

碗は17点出土した。内訳は染付中碗6点、小碗4点(紅猪口4)と陶胎染付碗3点や陶器碗3点、灰釉大碗の構

成である。皿は染付6寸中皿、4寸小皿が各1点、陶器4寸皿4点と碗の3寸蓋10点の出土が特筆され、水注、徳利2点である。囲炉裏内には茶釜が置かれ内部には布袋に入った茶葉が入る。囲炉裏と仏壇の間には陶胎染付碗(10)と片口、仏壇の脇から徳利(23)、仏壇の棚板上にはお盆にのった紅猪口4点(1~4)が伏せて置かれる。仏壇下の戸棚には染付皿2点(13,14)、染付碗4点(6~9)、水注(28)、丸膳、漆椀2点、揃いの櫛3点が収納されていた。建物外側には箱に収納された蓋10点(17-1~4,18-1~6)が出土した。

規模の小さな小屋であるが灯火具が3組出土した。木製品の椀13点、浅椀3点、深椀2点と漆椀が出土し、木製食器の数が多い。おひつと鉄鍋は2点出土した。

#### 4号屋敷20号建物(主屋)

陶磁器片が15点出土したのみで、個体数を確認できるものは瀬戸・美濃陶器の仏飯器である。木製品は椀2点と浅椀で建物外の東側の垣根から茶釜が出土した。

#### 15号屋敷27号建物(主屋、二階床張建物)

碗は16点出土した。内訳は染付中碗6点、小碗(紅猪口)と陶胎染付碗2点や陶器碗3点、灰釉大碗3点、小碗の構成である(図5)。その他に皿は陶器の5寸型打皿3点、4寸小皿3点、大小の6.5寸染付中皿、5.5寸灰釉中皿や水注と徳利2点が出土した。木製品は椀2点、深椀4点、浅椀4点、平椀10点、壺椀11点、漆椀2点が出土した。

多くの遺物は土間と縁側から洗い場にかけての建物外から出土し、これらは建物の壁ごとまとまって移動したものと考えられる。1号囲炉裏と2号囲炉裏の間から鉄鍋、鉄蓋が出土し、1号囲炉裏から鉄釜、2号囲炉裏の南から薬缶の蓋が、土間の南東隅から水注が出土した。鉄鍋の個体数は4である。

縁側から洗い場にかけて移動した壁が折り重なり、破壊を受けた戸棚が出土した。戸棚周辺からは鉄鍋、包丁、10客膳、茶釜、陶器碗や型打皿、染付碗、陶器大碗、蓋付徳利、おひつ6点(最大9)、わっぱ、染付小椀、三宝、徳利、すり鉢、陶胎染付碗、10客の壺椀、10客の平椀、浅深椀6点、柄杓、櫛、膳、茶筅などが集中して出土した。これらの遺物の多くは戸棚に収納されていた可能性が高い。この中には竹かごに収納された染付碗3点(以下27号建物3,6,8)や水注(25)が出土した(図7)。これらの食器は籠に入れ、出し入れが簡易なことから日常の食事で組み合わせて使用した可能性が高い。飯茶碗と湯茶や汁等を入れた水注(汁次)を組み合わせた食風景を彷彿させる。

#### 13号屋敷39号建物(主屋)

碗は18点出土した。内訳は染付中碗3点、筒碗2点、小碗2点(紅猪口1)と陶胎染付碗2点や陶器碗4点(大碗1)、小碗5点の構成である。猪口、皿は13点と多く内訳は染付皿2点、肥前陶器の揃い4寸皿5点、大小の

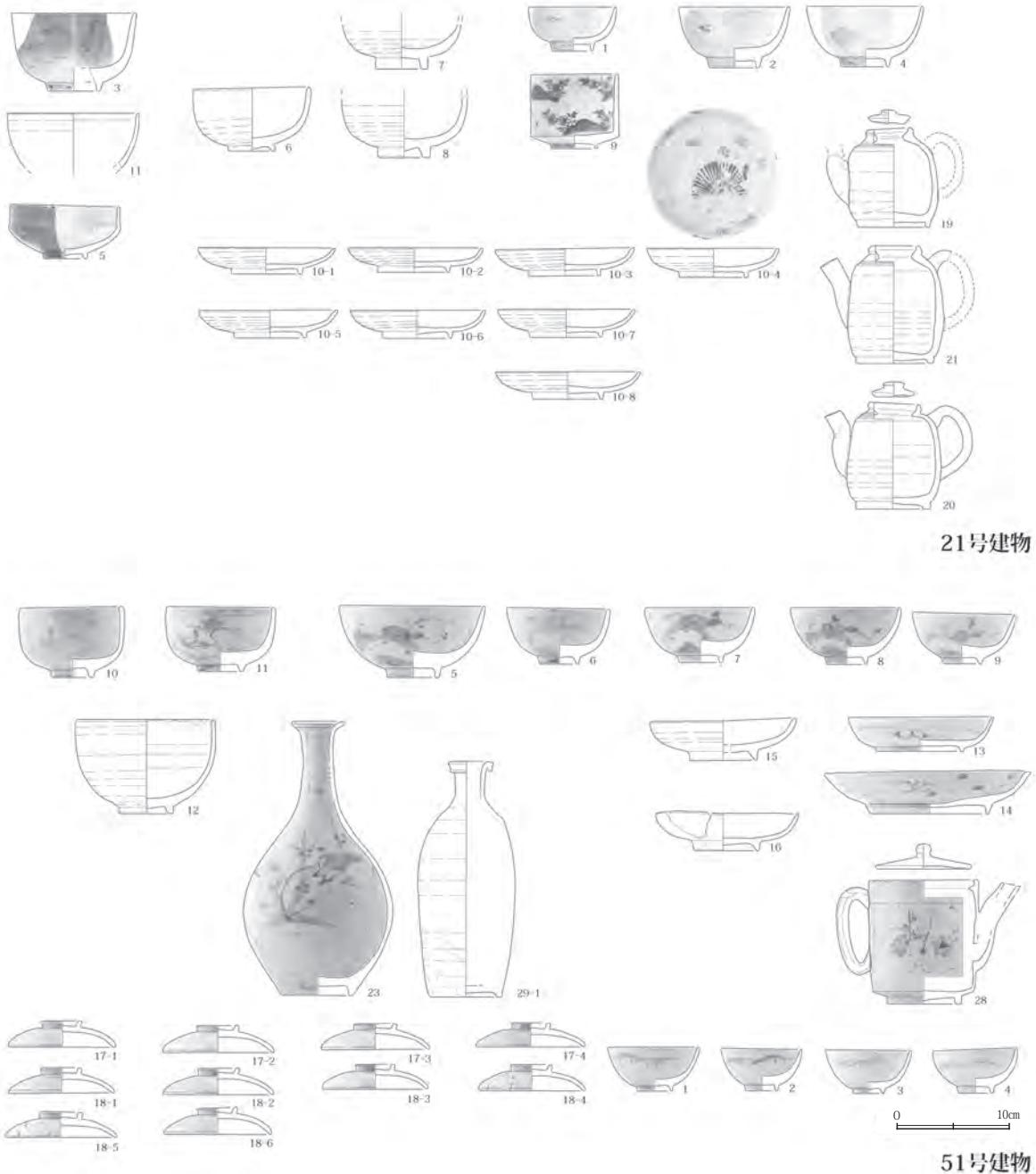


図4 21～51号建物の食器

7寸と5.5寸中皿2点、4寸小皿と瀬戸・美濃陶器の小皿3点が出土した。木製品の椀は出土していない。調理具はすり鉢や鉄鍋3点が出土した。

1号囲炉裏から陶器皿(以下39号建物28)、片口が出土し、他の遺物は建物南隅から建物外に集中して出土した。これらは染付小椀2点(紅猪口1)、染付碗、染付筒碗2点、陶胎染付碗、陶器碗3点、陶器小碗5客、陶器皿3点、揃い皿4点、猪口、徳利で泥流により建物から押し出されたものと考えられる。鉄鍋は4片が出土した。

#### 16号屋敷40号建物(主屋)

瀬戸・美濃陶器の飴釉尾呂碗のみが出土した。鉄製品

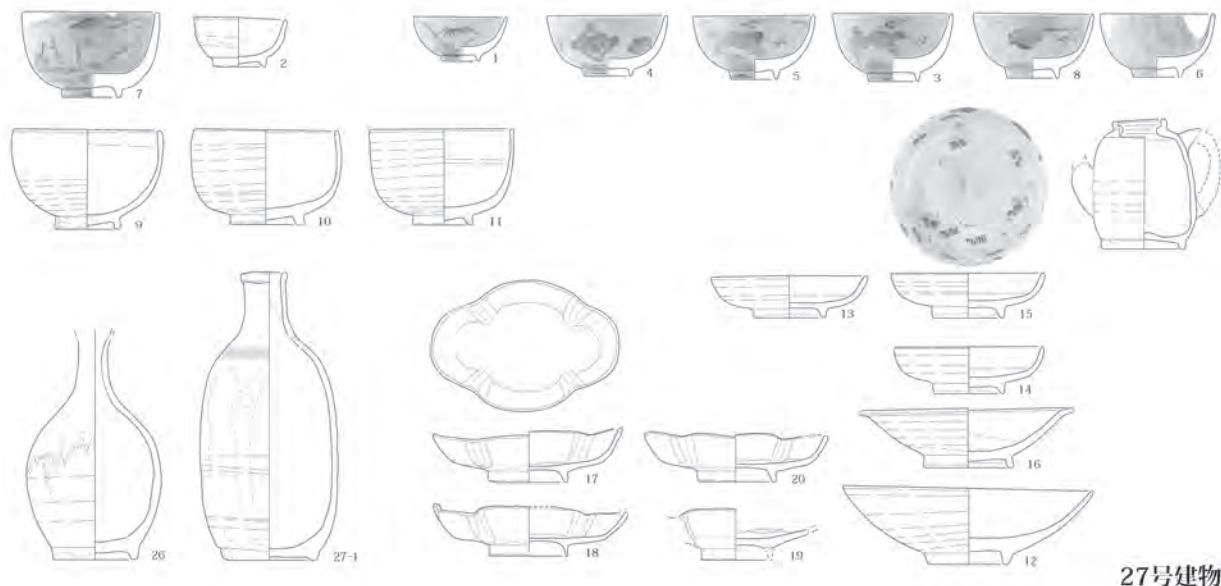
や木製品は出土しない。埋没時に1号囲炉裏は使用されていないが、竈には炭の破片が残存する。

#### (5)建物の居住者と食器構成を推定する標識

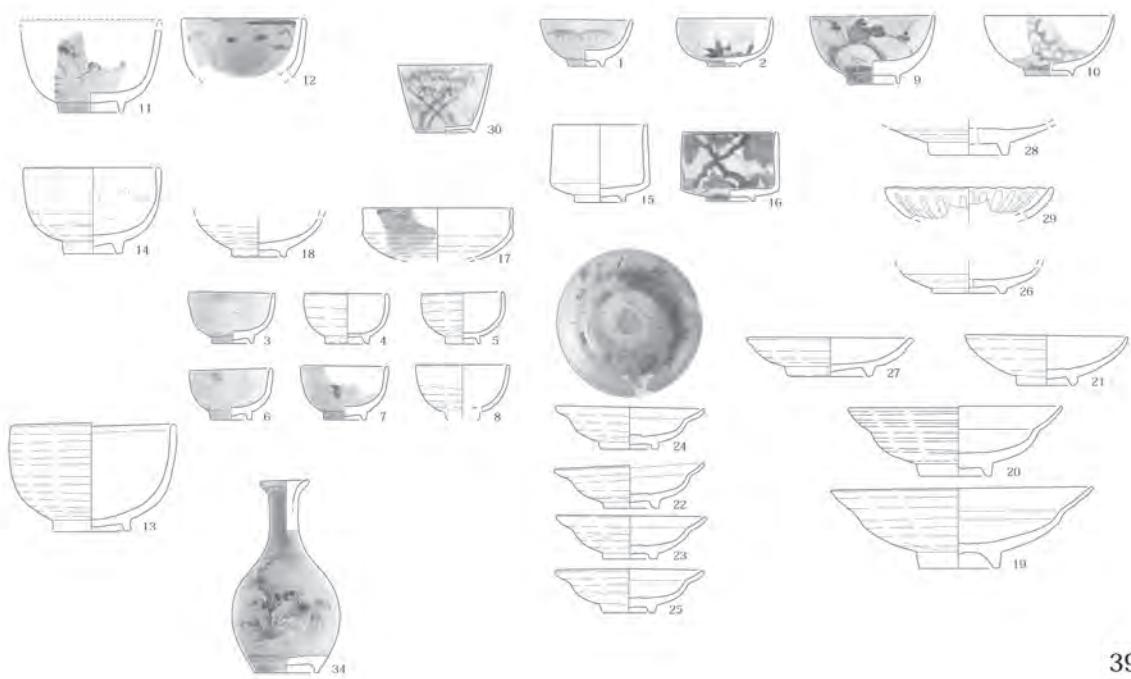
##### 12号屋敷42号建物(小さな主屋)

12号屋敷42号建物は比較的規模の小さな主屋からなり、集落内の中流農家の最下層に位置づけられている。出土した食器の構成も単純であることから小規模な家族の最小単位の食器利用を復元する上で標識となる。

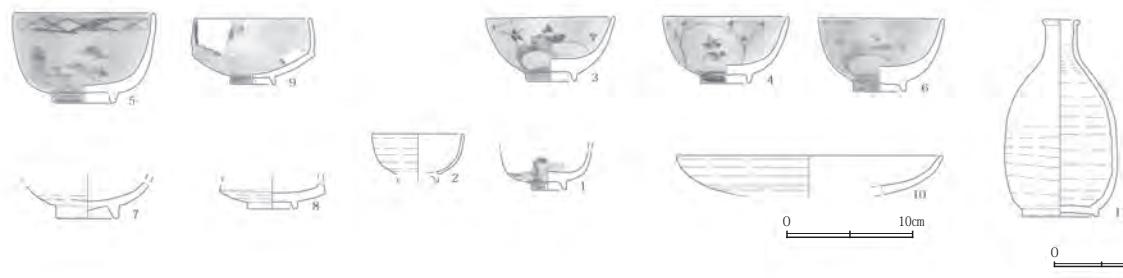
42号建物から碗は12点出土した。内訳は染付中碗4点、小碗と陶胎染付碗や陶器碗3点、小碗、筒碗、せんじ碗の構成である。その他に陶器皿2点、徳利、漆深椀が出



27号建物



39号建物



42号建物

図5 27・39・42号建物の食器

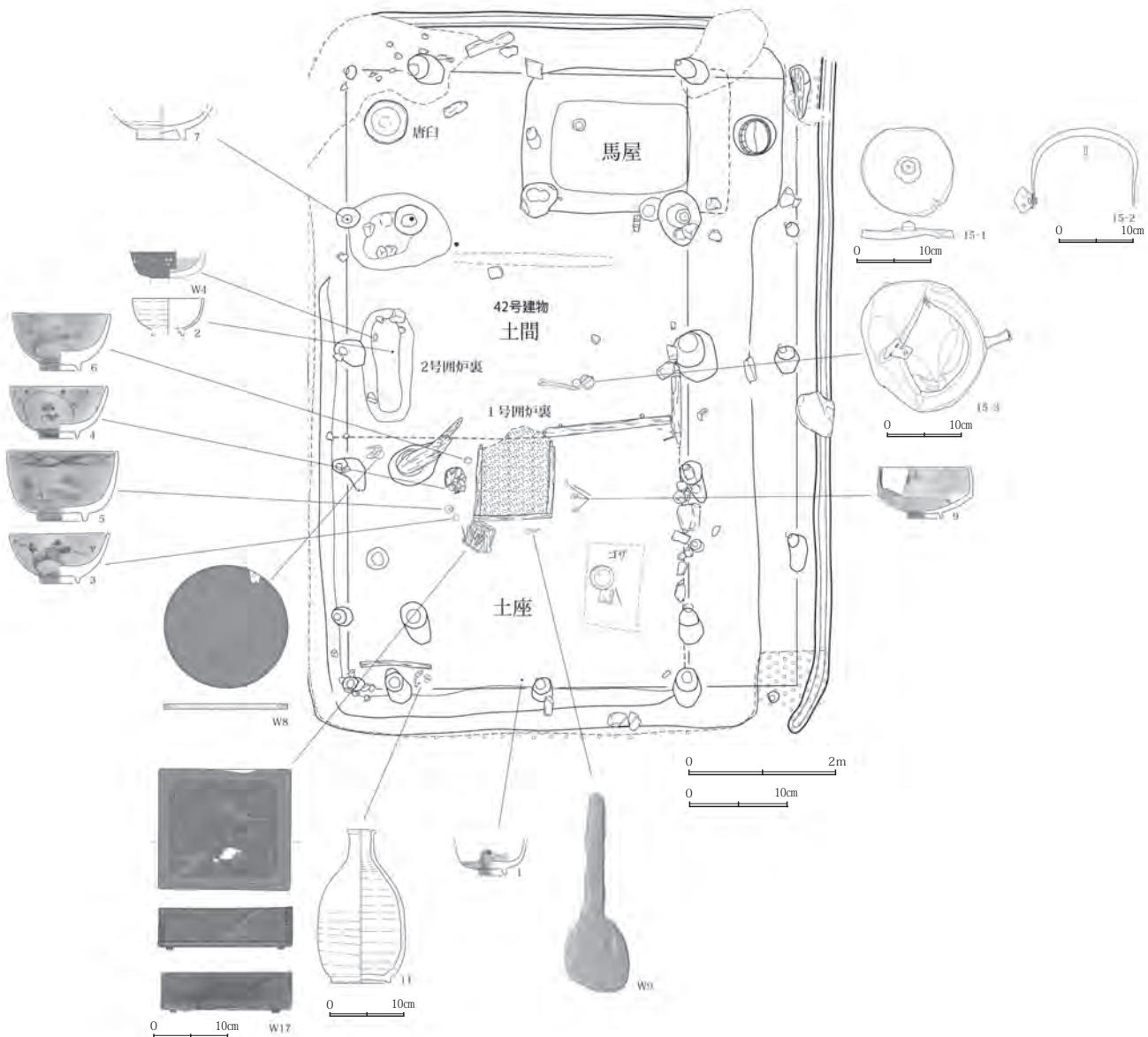


図6 42号建物から出土した食器

土し調理具はすり鉢が出土した。陶磁器の構成要素は多くなく、筒碗は建物西側の溝から、皿は床下から出土した。

1号圍炉裏西端から染付碗が入れられた竹籠が出土し、周辺の碗も収納されていたものと考えられる(図6)。1号圍炉裏の東からせんじ碗が、西から陶胎染付碗が、南からはしやもじや重箱が出土した。1号圍炉裏北東の土間からは薬缶と蓋とつるが、2号圍炉裏から陶器小碗や漆椀が出土した。建物内の土座にはネコが布かれ、1号圍炉裏を中心に時計の針で3時から7時の空間には鉄製品の工具や石臼が置かれ主に作業空間となっている。圍炉裏の周囲には食器や喫煙具が置かれ、生活利用の場が読み取れる。

長野原町川原湯の民俗例から42号建物の土座は1号圍

炉裏を中心に居住者の配置が推定できる。すなわち土間から正面が当主の座(ダンナザシキ)、主人に向かって左横が妻の座(ヨコザ)、食器が置かれた空間が客座(ヤクザ)であろう。圍炉裏端の陶胎染付碗とせんじ碗の内面は茶渋の付着が著しいことから、これらを日常の喫茶で使用したことは確実である。碗の出土位置から当主が陶胎染付碗、ヨコザに置かれたせんじ碗を妻が使用した可能性がある。土座に近い土間から銅製の薬缶が出土し、これで茶葉を煮出していたのであろう。建物南縁からは徳利や染付小碗が出土しており、櫛なども出土した。この空間は寝間と想定されるため、徳利と小碗の位置は酒類の飲用を彷彿するが、その可能性については今後の類例を待って評価したい。

肥前磁器の染付碗3点は竹の籠に置かれて日々の食事

で使用された状況を示し、小ぶりの染付碗は飯茶碗、陶胎染付碗とせんじ碗は喫茶碗として使用し、完形の飯茶碗から3人の居住が推定される。櫛2点の出土は女性の存在を示し、当主と妻子の家族構成が想像される。皿の使用は不明瞭であるが、漆の剥離がない重箱の使用については、今後検討の余地を残す。漆塗りの桶蓋はおひつで、しゃもじと組み合う。おひつの中身は雑炊でなく麦飯等の固形物の糧飯である可能性が高い。囲炉裏から鉄鍋が出土しなかったのは、これは財産であり居住者が避難時に持ち出したからではないか。9、21、27、51、53号建物以外で鉄鍋の出土はない。

### 3. 考察

#### (1) 建物の居住者像と食器構成

9号屋敷14号建物は集落内で標準的な床面積の家屋からなり、42号建物と同様に飯茶碗は磁器碗、喫茶碗は陶胎染付碗や陶器碗、小碗と想定され3～4人の居住が推定される。陶胎染付碗は当主が喫茶碗として使用し、3人が皿や小碗を使用した。また紅を使用する成年女性が認められ、大皿片は集石に、すり鉢は洗い場で転用されている。

5号建物は不動院庫裏に比定され、肥前磁器の染付皿を使用する3人の居住が推定される。また上手の染付小皿は住職など有力者の所有物の可能性を示す。肥前磁器を主とした食器構成は他の建物のそれに比べて稀な事例であり、寺僧が集落内で上位の階層に属したことを示唆する。

2号と3号屋敷は規模の大きな屋敷で名主層の家屋と考えられる。2号屋敷は主屋の9号建物に対し小屋で囲炉裏を有する10号建物が付随する。後者のそれは過去に使用人が居住した可能性がある。

9号建物は竈に置かれた鉄鍋が埋没当日の朝まで使用された状況を、2号囲炉裏の碗は埋没前までの2～3人による喫茶や朝食の状況を示す。磁器碗は飯茶碗、陶胎染付碗やせんじ碗は喫茶碗と想定される。食器構成から磁器碗や陶胎染付碗、陶器碗を使用する4人程度を想定し、色絵小碗は日常使用された。陶胎染付碗の保有数が多く、これは来客などにも使用された可能性が高い。

3号屋敷は主屋の16号建物に対して使用人が居住したと想定される小屋で囲炉裏を有する18号建物が付随する。後者のそれからは陶器と漆椀片や瓶と灯火具が出土した。

16号建物 1号囲炉裏脇から1・2号囲炉裏内から陶胎染付碗2点が重なって出土した。これは喫茶の状況証拠を示し、埋没直前までに2か所3人で喫茶が行われた。磁器碗は飯茶碗、陶胎染付碗や筒碗、小碗は喫茶碗と想定される。食器構成から磁器碗と陶胎染碗を使用する5人程度を想定する。9号建物と同様に陶胎染付碗の保有

数が多く、来客用に使用された可能性がある。16号建物から下駄8点が出土し、その個体数は未確認であるが、埋没時に4人以上の人々が存在していた可能性がある。碗は多数出土したが、皿の出土は極めて少ない。建物の竈で鉄釜が出土しており、埋没直前の朝に使用された可能性がある。紅を使用し、かんざしや櫛を有する成人女性の存在が認められる。

6号と9号、13号屋敷は集落内の中農層と考えられる家屋である。

6号屋敷15号建物は、14号建物と同規模の建物である。磁器碗が数多く出土したが完形品でみると磁器碗の飯茶碗と陶胎染付碗、陶器碗を喫茶碗として使用する4人程度が想定される。囲炉裏から出土した食器は、埋没前までに食事や喫茶で使用されていた状況を示し、布痕が残る茶釜の存在は直前の喫茶の状況を示す。囲炉裏周辺から鉄鍋や茶釜が出土しており、囲炉裏端での炊事や給茶で使用された。すり鉢は底面の摩耗が著しく、世帯での長期の使用が予想される。紅を使用する成年女性が存在する。磁器碗の保有数は多人数の使用を想定されるが、建物の規模から大人数の居住を想定しないため、使用人などの存在を思わせる。色絵製品の所有は居住者の経済的地位を示す。

4号屋敷20号建物は5号屋敷21号建物(付隨51号建物)と東西に長い屋敷地の東西に並んで建てられている。15号屋敷27号建物は二階建の建物であるが、床面積が14・15号建物と同程度の規模である。しかし、これらの建物から出土した陶磁器は14・15号建物のそれとはかなり様相が異なる。このことからこれらの建物群は、集落内に置いて中規模の家屋とは異なる生活様式を有した家屋であると想定される。これらは、7号道と53・57号溝を隔てて敷地が連なっており、集落中心部に位置して街道沿いに向かい合っている。

5号屋敷21号建物(主屋)は染付碗や陶器碗の保有数が多いが陶胎染付碗2点、せんじ碗などから3～4人前後の居住が想定される。しかし漆椀7点、鉄絵小皿が8客揃い、膳10点の食器構成は非日常の会食の用途を示している。すり鉢2点と碗や皿の数量から大人数での食器使用が推定されるが、非日常と考えられる10客揃い膳など饗応での使用が想定される。このために、日常において使用した食器との分類は困難で、板間に収納されていた大部分は非日常の会食で使用する食器と思われる。埋没直前は囲炉裏とその周辺に染付碗や膳に入った漆椀があるので数量は多くない。灯火具は受皿大2点と平仄で3組である。竈に据えられた鉄釜は埋没直前までの使用状況を示す。すり鉢は底面の摩耗が著しく、世帯での長期の使用が予想される。紅猪口が出土し、櫛9点が囲炉裏北東2点、板間2点、板間南壁2点、2号収納箱の4か所から出土し、複数の女性が存在する。下駄が25個出

土し、4個が男下駄、21個が女下駄であることからも埋没前に女性が多く存在したことを示唆する。

5号屋敷51号建物は物置としての機能を有し、かつ人が居住した建物と考えられた。食器は染付碗に陶胎染付碗と陶器碗から4~6人の食器構成が想定される。木製品の椀は、浅椀が3客、木製椀6客である。陶胎染付碗と灰釉碗に茶渋の付着が認められ、日常的な喫茶の状況を示す。囲炉裏に据えられた茶釜に茶葉が入った状態で出土したことから、埋没前に喫茶を行っていたものと考えられる。仏壇の棚板上の紅猪口4点は伏せて置かれ、すぐに使用できるように正位で置かれたと考えられ興味深い。櫛4点も出土しており、紅猪口と合わせて成年女性4人の存在が想定される。

しかし建物の規模からこの空間に2人以上が居住しているとは想定しがたい。ただこの小屋は囲炉裏を備え、食器や調理具が揃っているので、喫茶や食事の場でもある蓋然性は高い。多数の食器と鉄鍋2点、鍋蓋3点、おひつ2点の出土は、この場所が通いの使用者などの食事や休憩の場であるとともに他の建物の食器を保管した場所であることを示唆する。

また、主屋の21号建物でも櫛が複数出土していることは、両所に複数の成人女性が存在することとも合致する。陶器大碗1点に大小の磁器皿と徳利、小皿などの食器の構成は後述する39号や42号建物に共通する食器の組み合わせである。

21号建物からは10客膳や8客の小皿が出土したが、これに見合う数の椀は伴わない。51号建物からは6客以上の蓋付椀や10客の蓋が認められる。21号建物と51号建物は補完し合って食器を保有していた可能性が濃厚である。

一方で21号建物と同規模の20号建物には、集落内的一般的な主屋にみられる竈や室、馬屋、唐臼がみられない。また、出土遺物も茶釜と少数の木製椀以外に日常的な食生活の痕跡が皆無である。このことからこの建物は、21号建物や51号建物の居住者やこれに通う使用者らが営みに関わった可能性を指摘する。それは総板間の家屋構造を有し、東西の板間に囲炉裏を配置した建物が来訪者への接待を伴う会食の場であり、いわゆる茶屋のような施設である可能性を指摘する。20号建物から下駄が10点出土し、板間3の西端から4組8点の丸下駄がまとまって出土し、それは女性用である。21号建物からは28(4が角、他は丸下駄)点が出土し、その個体数は不明であるが埋没時に多くの女性が出入りしていたことに間違はないだろう。

15号屋敷27号建物の食器構成から磁器碗を飯茶碗として使用する4~5人程度の居住が想定される。すり鉢2点、鉄鍋4点、火鉢と灯火具は2組出土し、大人数での食生活が推定される。紅猪口と鬚水入れや木製品の櫛6

点から複数の成年女性が存在しており、三味線が出土した。木製品の平椀と壺椀は10~11客組で非日常に使用する饗応のための食器類である。その中で特筆されるのは口径11.2cm、器高7.6cmの瀬戸・美濃陶器灰釉碗の下から茶筅、茶柄杓が籠に入れられた状態で出土している。これらは組み合わされて収納されていた(図7)。

このようなことから27号建物には、会食に使用される膳やおひつなどの食器類が豊富で複数の成人女性が存在し、音曲具も存在することから、この建物内で接待を伴う飲食が行われていたことが想像される。その様子はその先の想像が許されるならば床張りの二階で行われ、この建物は「旅籠」だったのではないか。

なお、27号建物の縁側と洗い場の間付近からは熟年後半以降の年長女性と6歳と4歳の幼児2人の遺体と大引の下から猫の遺体、建物の東側20mから成人女性の遺体の一部が発掘されており、27号建物から逃げ遅れて被災した居住者の可能性を示唆する。

13号屋敷39号建物の食器構成は飯茶碗の磁器碗に陶胎染付碗や筒碗、小碗を喫茶碗として使用する3人が想定される。紅猪口から成人女性の存在があり、来客用の食器が豊富であることから21・51・27号建物のそれと共に通する部分が多い。また、隣接する40号建物は居住実態が僅少であり、20号と21号建物の関係に似ている。

13号屋敷39号建物の食器構成は磁器の飯茶碗や陶胎染付碗、磁器小碗を喫茶碗として2~3人程度が想定される。成人2人は陶胎染付碗と筒碗に染付皿の使用を想定した。紅猪口から成年女性の存在が推定される。これらの基本的な食器に加えて陶器からなる大碗1点に小碗5点、大小の中皿2点と小皿5点に徳利が出土しており、特筆される。これらの食器類の組み合わせは27号建物で出土しており、会食で使用された可能性が高い。

16号屋敷40号建物は、39号建物よりやや規模の小さな小屋であり、日常的な生活の痕跡が極めて少ない。無人の借家や39号建物主屋の居住者3人の血縁者の生活跡(隠居小屋)の可能性などが想定される。

肥前磁器の猪口は5、9、15、16、39号建物から1点ずつ、陶器のせんじ碗は15、21、42号建物から1点ずつ、9号建物から2点が出土して出土している。こうしたことから猪口やせんじ碗は性差(ジェンダー)を示す食器である可能性が高く、猪口は当主が使用し、せんじ碗は妻の喫茶碗である可能性がある。また猪口の出土は福島中町遺跡での出土数が少なく、鎌原集落の延命寺跡で15客揃いが出土するなど遺跡による出土量の差が大きい(清水2007)。『守貞謹稿』に「猪口は和えもの等をもる」とあり向付や酒礼での使用も想定されるが、その使用の実態については不明な点が多い。

## (2)振り茶の喫茶碗と茶筅

27号建物からは多数の陶磁器や木製品が出土し、それ

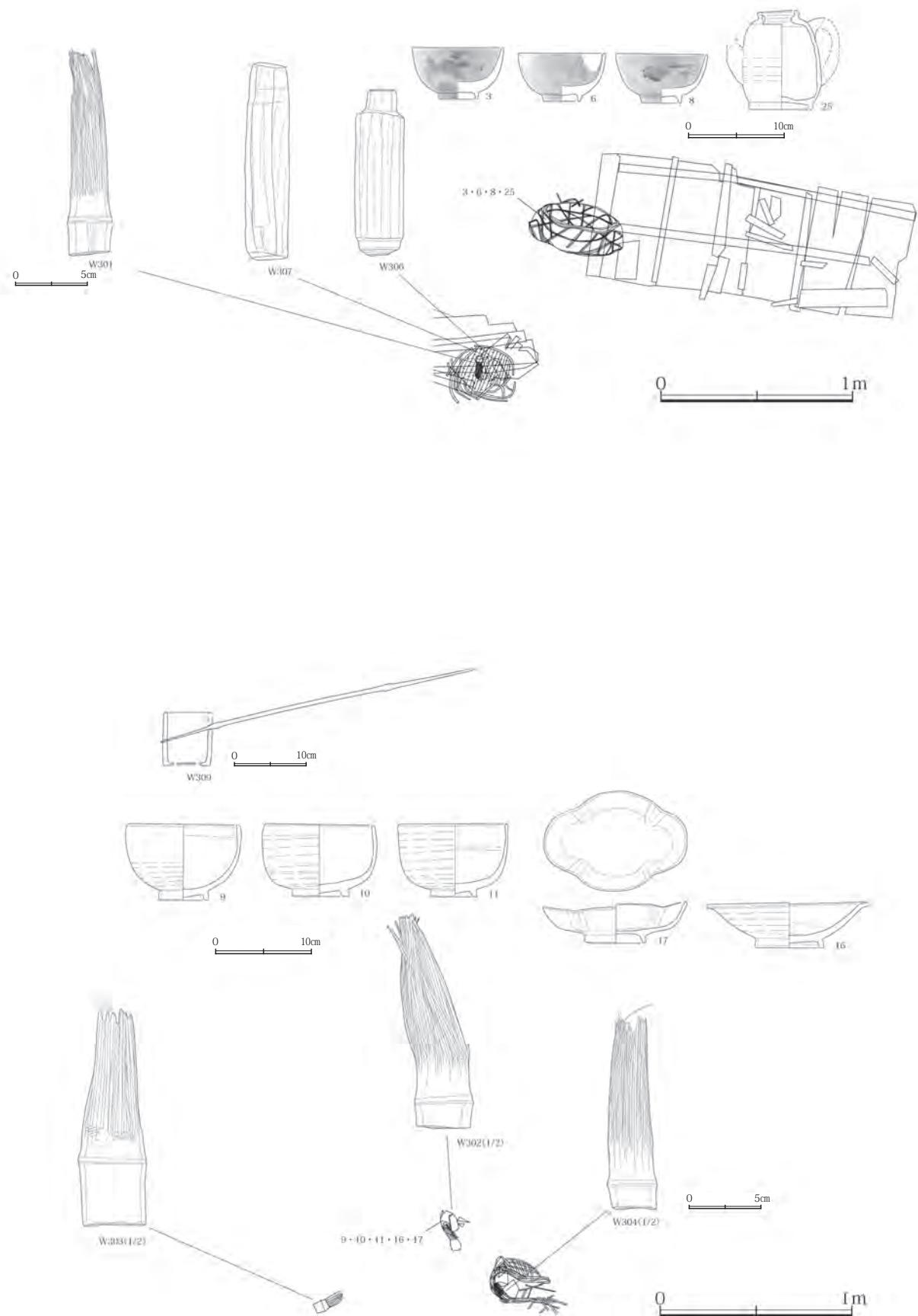


図7 27号建物の食器の出土状態

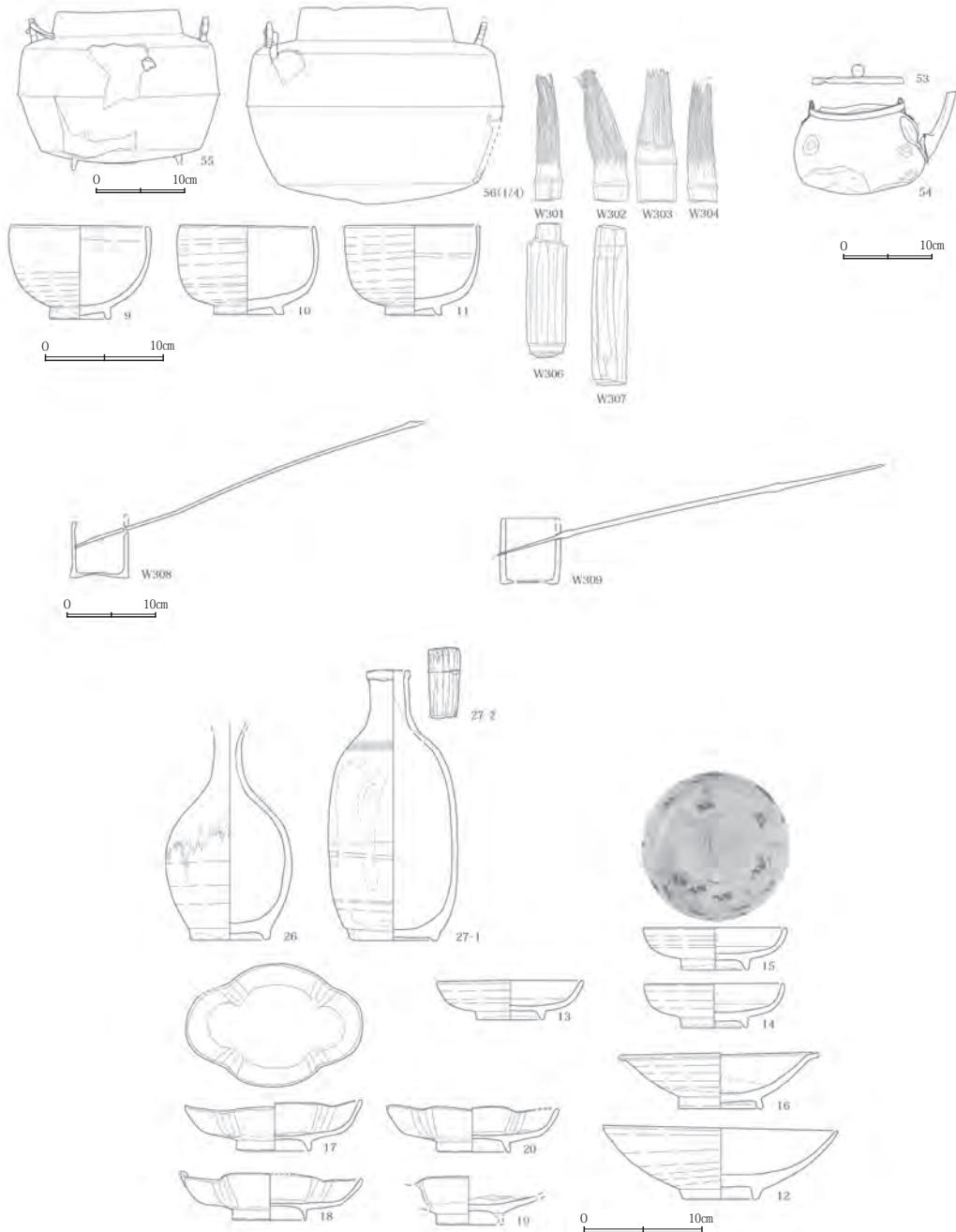


図8 27号建物の喫茶具

らは戸棚と周辺に収納されていた可能性が高い。図7に示した3客の碗と茶筅、茶柄杓、皿は伴って竹製の籠から出土し、これらは瀬戸・美濃陶器御深井製品の型打皿と小皿、灰釉大碗の3客揃いである。これに茶筅4点、茶筅の柄2点、茶柄杓3点が伴い茶釜2点、薬缶が出土している。また大小の中皿2点や徳利2点もこれらと併に使用された可能性がある(図8)。これらは食器の組み合わせと考えられ、近似した食器類は39号建物や51・21号建物、西宮遺跡3号建物、7号建物で認められる。

これらの喫茶具は抹茶に使用する茶入や茶杓、煎茶に

使用する土瓶や急須を伴わない。このことから、碗は振り茶の喫茶碗と考えられ、大小の中皿と小皿は茶請けを供した食器である可能性が高い。しかし、竹製の茶筅を使用したとすると碗の内面に顕著な底面擦痕は認められない。このことから碗を振り茶として使用する頻度は、さほど高くなかったものと推定される。

51号建物では茶釜に茶葉と思われる植物の葉が布製の茶巾袋に入れられた状態で出土しており(写真1)、15号建物の茶釜も布痕跡を残す。また西宮遺跡からも茶葉や布が入った状態の茶釜や薬缶が4点出土した。この様な

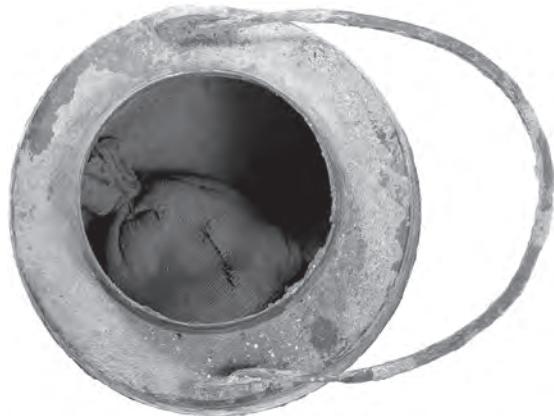


写真1 51号建物から出土した茶釜(石川原遺跡(4)から)

茶葉入り煮沸具の出土から集落で喫された茶は、茶釜や薬缶で茶葉を煮出して飲む享茶であったと考えられ、江戸期の庶民が鍋や釜で茶を煮出して飲んでいたとする考え(鄭銀珍2010)を裏付ける。

鈴木牧之が文政年間に越後国秋山郷を訪れて著した『秋山記行』清水川原には、婦人が煎り出した茶葉で、大きな茶碗に茶筅で茶を点てる記述がみられる(信州大学教育学部付属長野中学校1991)。同様に信濃国飯島村でも文政年間に書かれた『農夫論語』に粗製の番茶を煮出して、茶筅で泡立て五六八と呼ばれる口径12~15cm大の茶碗で振茶を行ったことが記されている(中村1992)。信濃の伊那や吾妻地域と三国山脈を隔てた信濃川流域の山間集落にも振り茶が広がっていたことが窺え、江戸後期の中部日本各地に振り茶の習俗が存在したことは間違いないだろう。

日本の喫茶文化において振り茶は、茶道に対して庶民の喫茶として位置づけられ、その民俗例は各地に残存し、中村(1998)はその茶粥などと関連した分布を示した。また振り茶は女性の集まりで行われる大茶との関係性が示された(中村2015)。

民俗例として現代まで伝えられる振り茶の習俗は新潟県糸魚川市や煮出した発酵茶を泡立てて飲むバタバタ茶が富山県朝日町蛭谷に伝えられている(漆間1981, 2001)。

島根県松江市のボテボテ茶に使用する茶碗は、口径11cm、器高8cmである。

富山県朝日町蛭谷のバタバタ茶の碗は五郎八碗と称され、古いものは口径10cm以上、器高8.6cmである(漆間1982)。現在、蛭谷で使用されている五郎八碗は褐色釉の陶器碗で口径10.5cm、底径4.8cm、器高8.0cmで、体部内面は内反する特徴を有しており、これは泡が碗の外にこぼれないためだという(写真2)。

27号建物から出土した瀬戸・美濃陶器の碗に対してやや大ぶりの碗が他の建物から出土した。これらは5号建物6の碗(口径14.6cm、器高9.2cm)、39号建物13の碗(口径12.7cm、器高8.6cm)、51号建物12の碗(口径12.1cm、



写真2 朝日町のバタバタ茶の五郎八碗

器高8.4cm)であり、いずれも瀬戸・美濃陶器である(図3~5)。51号建物の碗は、朝日町蛭谷の碗と同様に口縁部内面がやや内反している。また、16号建物の陶胎染付碗は6個体が口径10.2~11.7cm、器高6.7~7.8cmで内面底部に弱い擦痕が認められる。これらの陶器碗は口径や法量が大きい大碗に属し、他の建物から出土した瀬戸・美濃陶器の碗と比較して特異な存在である。これらは27号建物の碗と同様に振り茶の喫茶碗として使用された可能性が高い。



写真3 朝日町のバタバタ茶の夫婦茶筅

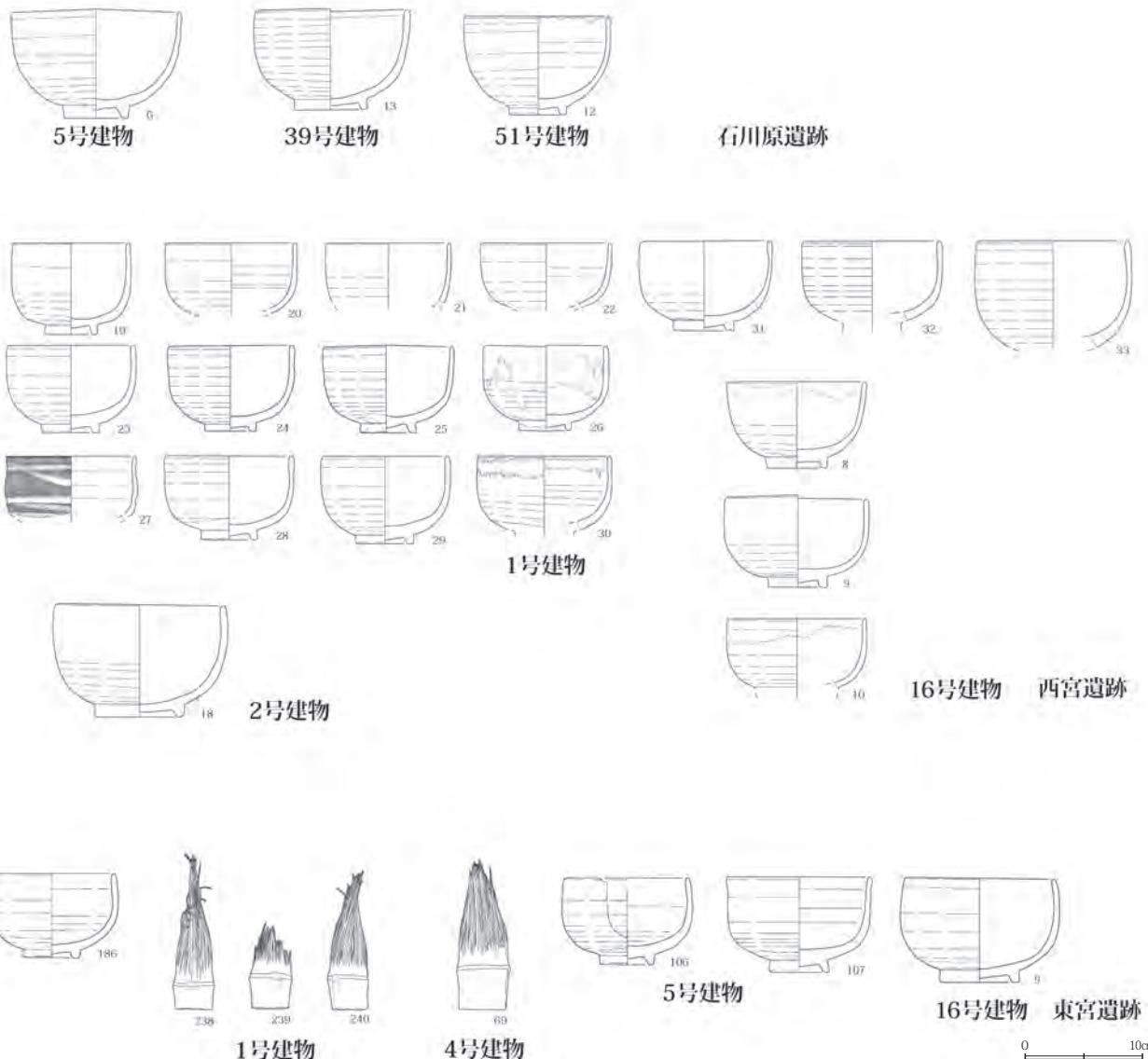


図9 石川原遺跡と西宮・東宮遺跡から出土した陶器の大碗と茶筅

27号建物出土の茶筅は節から穂先が10.6~13.3cmで、朝日町のバタバタ茶の夫婦茶筅(写真3)のそれは12.4cm、糸魚川市梶屋敷のタテ茶は13.5cm(漆間1982)と茶筅の先端部の長さに共通性を認める。また、朝日町の茶筅は2本1組で使用し、先端の4cmが曲がる使用痕を有する。このような曲がりは27号建物の茶筅の一部にも使用痕として残されている。

しかし27号建物から出土した茶筅4点の内3点は筅部を内外に分ける茶筅状竹製品IV b類(木川2000)に区分される。朝日町のバタバタ茶や他の振り茶で使用される茶筅は筅部を内外に分けないIII b類であり、27号建物の茶筅とは形状とは異なる。

また、茶筅と共に出土した木製品はソケット状に茶筅に挿して柄として使用された可能性が高い。その場合は想定される茶筅の節から柄の長さは12.3cmであり、朝日

町の茶筅が5.0cmであるのに対して著しく長く、民俗例にその類例を認めない。茶筅の持ち手の長さは使用する碗の大きさによるのではないだろうか。長い柄の茶筅は、口径が大きく、器高も高い大法量の碗の存在を示唆する。

石川原遺跡周辺の東宮遺跡、西宮遺跡の建物からも茶筅や陶器大碗が出土し(図9)、茶釜、薬缶も出土した。これらも振り茶の喫茶碗である可能性が高い。

東宮遺跡では1号建物238~240の茶筅3点と茶釜が、4号建物69の茶筅が、5号建物107の碗(口径12.3cm、器高8.0cm)と茶釜の蓋が、16号建物9の碗(口径12.7cm、器高8.8~9.0cm)が出土した。

西宮遺跡では1号建物33の碗(口径12.5cm)と19~32の碗(口径10.2~11.6cm、器高6.6~7.8cm)14客と茶釜の蓋や薬缶が、2号建物16の碗(口径14.5cm、器高9.6cm)と茶釜の蓋2点や薬缶が、16号建物8~10の碗(口径11.8

～12.2cm、器高7.3～7.6cm大) 3個体が出土した。

茶を煮出す金属製煮沸具は、西宮遺跡では3号建物から茶釜の蓋?が、4号建物から茶釜や布が入った薬缶が、6号建物からも茶釜が、7号建物から茶釜や薬缶が、15号建物から薬缶が、17号建物からは茶葉の入った薬缶が出土した。

このように両遺跡の埋没建物からも大振りの陶器碗や茶筅の出土がみられることから27号建物と同様に振り茶の喫茶習慣が行わっていた可能性が高い。

長佐古(2002)によれば江戸遺跡の陶器碗は茶の湯の茶碗を模した大振りの碗が占めていたが18世紀前半から碗の小型化が始まる。これはこれ以前に煮出した茶を茶筅で点じていたが、そのまま飲むお茶に移行したことで茶筅を使う大きな茶碗が不要になったためだと推測されている。江戸遺跡と同様に群馬県内の近世遺跡でも18世紀後半には陶胎染付碗のほかに肥前磁器や瀬戸・美濃陶器、京・信楽系陶器の小型碗が急速に普及し、この傾向は石川原遺跡や西宮遺跡、東宮遺跡でも認められる。

江戸時代の日常的な喫茶には考古学的な観点からのアプローチがなされており(長佐古2000, 2001, 2002)、享茶や淹茶、振り茶の陶磁器の碗が存在したことが示された。

18世紀後半に肥前磁器の染付筒型湯飲み碗が各地の遺跡で出土したことから、この時期は庶民に磁器の喫茶碗が一斉に普及した時期であると考えられる。石川原遺跡で出土した大碗と小型碗からなる喫茶碗は、近世前半より継続した茶筅で点じる振り茶と茶筅を使用しない享茶が共存した喫茶碗の様相を示すものと考えられる。

### (3) 喫茶を伴う会食の器

江戸時代の明和9(1772)年に刊行された料理書の『普茶料理抄』では、「煮茶の任やう」として客に菓子を出し、湯を沸かし、瓶を温め、そこに茶葉を入れ、熱湯を注ぎ少しあいてから茶碗を取り注ぎ、銘々盆にのせて供すると説明し、また普茶は茶を飲みながら菓子と煮菜を並べ、猪口と箸を添えて出し、小食の饅頭や菜包を出すとあり、



写真4 朝日町のバタバタ茶の茶請け食器

現在の飲茶に類似した淹茶の喫茶習慣が存在したとされる(江原2009)。

朝日町蛭谷のバタバタ茶は、振り茶に際して茶請けとなる煮物や胡麻和え等の野菜料理を鉢や小皿に盛り付ける(漆間1982)。現在は口径20.0cmの中皿と口径12.0cmの小皿で行われている(写真4)。27号建物から出土したこれらの食器も喫茶を伴う会食に茶請けとして使用されていた可能性が高い。

このような喫茶碗に伴う大小の中皿や小皿と小碗や徳利等の食器構成は、27号建物以外でも認められる。石川原遺跡以外に東宮遺跡7号建物の瀬戸・美濃陶器型打皿2点。13号建物のせんじ碗5客や10客の染付小皿と徳利。16号建物の陶器大碗に伴う瀬戸・美濃陶器型打皿。西宮遺跡5号建物の10客揃いの型紙摺り草花文小皿。3号建物の8客揃いの型紙摺り梅樹文小皿。7号建物の18客揃いの型紙摺り草花文小皿などがあげられ、いずれも茶釜や薬缶の出土を伴っている。

このことは、この地域の集落で恒常に来客を寄せる会合が行われ、年中行事やまつり等の中で喫茶や飲酒を伴った会食が行われていたものと考えられる。また集落内には街道に面して旅人を饗應した可能性がある家屋が存在した可能性があり、これらの家屋の詳細な分析は今後の課題としたい。

### おわりに

かつてお世話になった滋賀県の考古学者兼康保明さんの著書に『考古学推理帖』があり、これには考古学による知的推理の醍醐味が語られている。文字どおり石川原遺跡の整理作業は、それ自体が未曾有の世界を垣間見る考古学による推理帖であり、終始にわたり知的好奇心に満ちた時間であった。

遺物は整理作業で分類され、報告書作成の最終段階で遺構との関わり、位置情報や共伴関係を照合した。本来ならば発掘調査報告書の考察に盛り込むことが必要だったが『石川原遺跡』発掘調査報告書の刊行年度に本文を上梓できたことで良しとしたい。報告書と一緒に活用いただければ幸いである。

中沢悟整理嘱託員には報告書の編集担当として全般にわたりご教示を得た。中沢氏の協力なしでは本文の執筆は不可能であることを明記して感謝したい。洞口正史専門調査役には石川原遺跡、大西雅広専門調査役は陶磁器について、板垣泰之専門員(主任)は木製品について有益なご助言を得た。廣津真希子、三浦睦実、小平千晴、根井美智子の皆さんには陶磁器の実測図作成でご尽力いただいた。資料収集には入間市博物館、伊勢半本店紅ミュージアム、朝日町立バタバタ茶伝承館、八ヶ場天明泥流ミュージアムを利用した。以上の方々に御礼を申し上げます。

## 研究紀要40

### 文献

- 荒牧重雄1968『浅間火山の地質』地学団体研究会専報14 pp1-45  
荒牧重雄1993『浅間火山地質図』火山地質図6 通産省工業技術院地質調査所  
いさぼうネット2021「天明三年(1783)の浅間山天明噴火と天明泥流」  
<https://isabou.net/>  
今井 博・三ヶ田均 1982 「1783年天明三年浅間火山噴火に伴うテフラと古文書の研究」『火山』27-1 pp.27-43  
漆間元三1981「振り茶の習俗とその周辺」『日本民俗学』135 pp.1-17  
漆間元三1982『振茶の習俗—新潟・富山・愛知・奈良・島根・愛媛・鹿児島・沖縄』民俗資料選集12 194P  
漆間元三2001『続 振茶の習俗』岩田書院 104P  
江原詢子・石川尚子・東四柳祥子2009「煎茶の普及」『日本食物史』吉川弘文館 pp.144-146  
神崎宣武1996「ワンは運搬容器で接吻容器」『うつわ』を食らう 日本人と食文化』NHKブックス pp.13-80  
木川正夫2000「茶筅状竹製品の系譜」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』1 pp.57-62  
黒澤照弘・大西雅広2009「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 関東・東北・北海道編』第19回九州近世陶磁器学会資料pp.48-135  
清水 豊2007「被災地域の発掘調査でわかったこと」『江戸時代、浅間山大噴火』かみつけの里博物館pp.9-35  
信州大学教育学部付属長野中学校1991『第八卷秋山記行 現代口語訳信濃古典読み物叢書』信濃教育会169P  
徐 垣・平 朝彦「粉粒液相としての堆積物重力流の運搬機構」『地学雑誌』98-6 pp.60-66  
早田 勉1995「テフラからさぐる浅間山の活動史」『御代田町誌自然編』御代田町誌編纂委員会 pp.22-46  
早田 勉2007「浅間火山1783(天明三)年の噴火と災害の経過—火山灰からの復元の試み」『江戸時代。浅間山大噴火』かみつけの里博物館 pp.45-54  
田村知栄子・早川由紀夫1995「史料解読による浅間山天明三年(1783年)噴火推移の再構築」『地学雑誌』104-6 pp.843-864  
鄭 銀珍2010「近世における京焼と茶碗の動向—鳴滝乾山窯跡出土の碗類を中心にして」『立命館大学アートリサーチセンター紀要』10 pp.73-85  
長佐古真也2000「日常茶飯のこと—近世における喫茶習慣素描の試み」『江戸文化の考古学』吉川弘文館 pp.99-126  
長佐古真也2001「食膳具と膳1 食器の構成」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 pp.174-175  
長佐古真也2002「「お茶碗」考 江戸における量産陶磁器の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』94 pp.61-82  
中村洋一郎1992「女性と茶」『茶の民俗学』名著出版pp.18-128  
中村洋一郎1998「茶を振る」『番茶と日本人』吉川弘文館pp.76-91  
中村洋一郎2015「抹茶法と番茶」『番茶と庶民喫茶史』吉川弘文館 pp.214-257  
萩原 進1985『浅間山天明噴火史料集成 I 日記編』372P  
萩原 進1989『浅間山天明噴火史料集成III 記録編(二)』381P  
安井真也・小屋口剛博・荒牧重雄1997「堆積物と古記録からみた浅間火山1783年のブリニー式噴火」『火山』42-4 pp.281-297  
安井真也2007「天明3年浅間山噴火の経過と災害」『1783天明浅間山噴火報告書』中央防災会議災害教訓の継承に関する調査委員会 pp.6-38  
発掘調査報告書  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(小野和之他編著) 2003『福島中町遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書318集238P  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(黒澤照弘編著) 2012『東宮遺跡(2)遺物編』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書536集552P  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(中沢 悟編著) 2017『東宮遺跡(3)』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書628集326P  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(中沢 悟編著) 2018『西宮遺跡(1)・西宮岩陰』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報

### 告書634集162P

- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(岩崎泰一他編著) 2020『西宮遺跡(2)・川原畠の宝篋印塔』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書670集287P  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(中沢 悟・洞口正史編著) 2021『石川原遺跡(4)』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書688集494P